

Title	経済学関係文献目録
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.3 (1958. 3) ,p.283(89)- 284(90)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	経済学関係文献目録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580301-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580301-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。また「マルクス主義とヒューマニズム」の著者P・ビゴは、「資本論」の哲学的解釈を企て、マルクス主義を人間の肯定と否定という宿命的な二重性の下で理解する。すなわち一方では人間並びに人間労働の尊厳という本質的な前提（労働過程の叙述・労働価値説に現われる）があつて、その形而上学的な色彩を避けるために、人間の疎外を現実世界そのものに内在する矛盾として表現していても、歴史は窮極には人間の価値を承認せざるを得ないという主張がマルクス経済学を貫いており、他方では超越者のイデー（経済的メカニズム）が全体系を支配して、観念論に対する批判は、直ちに人間精神の公然たる否定であると考えられる。このようにしてとらえたマルクスは、その人間主義的展望においてヘーゲルの次元を出ず、彼から《疎外》(Verfremdung, Versäusserung) という形而上学的な範疇を借用することとなり、ヘーゲルの弁証法を裏返して、実践的なエネルギーの中にその運動を躍動させる。そこからビゴは、「マルクスは生涯ヘーゲリアンにとどまった」という結論を導き出して、マルクスの経済学体系をも、ヘーゲル的世界の中に限定するのである。

マルシャルは、ビゴと同様に「マルクス主義とヒューマニズム」の序文はマルシャルの筆になる）、マルクスは人間を目的としてとり、社会主義社会においてその価値を恢復、実現すると考えていたとみるが、彼はまたマルクスによる哲学、経済学変革の意義を認め、ビゴ等がマルクスをヘーゲル化して解釈する傾向があるのに対

して、ヘーゲルを越え、人間を行為の場に抱えたことを高く評価した。だが結局は、《哲学者マルクスから経済学者マルクスへの転換》を正確に把握せず（「経済学・哲学草稿」の章句などをそのまま引用している。この点もビゴと同じ）、哲学にまでひき上げられた経済学の一面性を排して、総体として考察する場合の人間の精神的、道徳的要素を重要視せよというものである。確かに、それは社会の経済構造と機械的に結び付くのではなく、社会主義社会になっても、もしも正しい指導方式を欠くならば、政治制度の中に重大な欠陥を生み出すであろう。だが、それによって直ちに社会主義社会の擯取を語り、資本主義に引き比べるのは概念の混乱であるし、資本主義の中で、商品性を克服するほどに労働の文化的、道徳的要素が増大するというのは幻想にすぎない。彼は、このようにマルクス主義を《哲学的な人間学》の未熟なかたちに置き換えることによつて、階級的な、敵密に社会科学的分析を解消してしまつた。だが実際には、人間の道徳や主体性を強調することは、経済的決定論と矛盾するのではなく、逆に、経済構造の法則性を認識し、歴史の発展を法則的に理解することだけが、さまざまな人間行為を盲目的な偶然から救い上げ、その意義を科学的に評価する可能性を与えるのである。マルシャルの「人間の総体的な把握」も、サルトルの「具體的な人間学」も、このような基礎から改めて展開されるべきであろう。（白井厚）

経済学関係文献目録

統計学

B 6 二二五頁 二八〇円（大月書店）

財政・金融・保険

\* 財政学 井手文雄著 A 5 二六二頁 三五〇円（評論社）

\* 近代財政金融 現代経済学全集 4 鈴木武雄著 A 5 二七〇頁 三八〇円（春秋社）

\* 昭和財政史 11 金融 下 大蔵省昭和財政史編集室編 A 5 九五七頁 一九〇〇円（東洋経済新報社）

\* 経済統計学教程 上 A・N・ベトロフ編 大橋隆憲・木原正雄訳 A 5 三九〇頁 五八〇円（有斐閣）

理論・経済学史・経済思想

\* 講座 近代経済学批判 4——近代経済学による現状分析と政策——岸本誠次郎・都留重人監修 A 5 三二二頁 三八〇円（東洋経済新報社）

歴史

\* 近代経済学教室 4 木村健康・古谷弘編 B 6 三三七頁 二八〇円（勁草書房）

\* イギリス近代経済史 W・コト著 荒井政治・天川潤次郎訳 A 5 四三三頁 六五〇円（ミネルヴァ書房）

\* 近代経済学教室 4 木村健康・古谷弘編 B 6 三三七頁 二八〇円（勁草書房）

\* 封建財政の崩壊過程 安藤春夫著 A 5 五六二頁 一〇〇〇円（酒井書店）

\* 経済変動論 伊達邦春著 A 5 二七四頁 三五〇円（評論社）

\* 日本水産史 日本常民文化研究所編 B 6 三二九頁 五五〇円（角川書店）

\* 労働価値論史研究 L・ミーク著 水田洋・宮本義男訳 A 5 四一六頁 八五〇円（日本評論新社）

\* シェントリの勃興 社会科学セミナール A・トリーニ著 浜林正夫訳 B 6 一五七頁 一七〇円（未来社）

\* 市民革命思想の展開——古典経済学成立史序説——羽鳥卓也著 A 5 二八〇頁 四〇〇円（お茶の水書房）

\* 近世日本農業の構造 古島敏雄著 A 5 五七六頁 八〇〇円（東京大学出版会）

\* 現代資本主義と窮乏化法則 豊田四郎編

\* 農家経済 日本統計研究所経済分析シリ

経済学関係文献目録

八九 (二八三)

137 大内力著 A5 三二九頁 四五〇円(中央経済社)

俊彦・大島清・大内力共著 B40 四六三頁 一二〇円(東京大学出版会)

\*レーニン選集 7 マルクス・レーニン主義研究所訳 B6 二五四頁 二八〇円(大月書店)

社会政策

世界経済・貿易

\*毛沢東選集 3 毛沢東著 毛沢東選集刊行会編 A5 三五三頁 七五〇円(三書房)

\*日本社会保険史 佐口卓著 A5 二四七頁 四八〇円(日本評論新社)  
\*労働者 G・D・H・コール著 和田耕作訳 B6 一四六頁 二四〇円(紀伊国屋書店)

\*国際収支と日本の成長 神谷克己著 A5 三五七頁 六〇〇円(平凡社)  
\*資本主義諸国の国際決済と貿易金融 下 JI・VI・フレイ著 堀江正規・朝野勉編 B6 二四二頁 三四〇円(東洋経済新報社)

\*講座 社会学 4 1 家族・村落・都市 福武直・日高六郎・高橋徹編 A5 三二〇頁 二八〇円(東京大学出版会)

日本経済

経済事情

年鑑・辞典

\*現代日本資本主義大系 3 農業 大内力編 A5 三〇六頁 三〇〇円(弘文堂)  
\*日本経済四季報 19 一九五七―二 日本経済調査会編 B6 一四九頁 一九〇円(大月書店)

\*経済学文献季報 6 一九五七・四―六 経済資料協議会編 B5 二二二頁 五五〇円(有斐閣)

\*日本労働年鑑 30 一九五八年版 大原社会問題研究所編 A5 七七五頁 一五〇〇円(東洋経済新報社)  
\*労働年鑑 一九五八 桂労働関係研究所編 A5 六五〇頁 八五〇円(桂労働関係研究所)

\*日本資本主義研究入門 日本資本主義の矛盾の展開と運動 有沢広巳・宇佐美誠次郎・大島清・渡辺佐平編 B6 三二二頁 三三〇円(日本評論新社)  
\*日本資本主義の発展 2 楫西光速・加藤三〇円(日本評論新社)

社会思想  
\*レーニン選集 6 マルクス・レーニン主義研究所訳 B6 二二六頁 二五〇円(大月書店)

慶應義塾経済学会 経済学年報 1

- 近世初期の家数人数改と役家について……………速水 融
- いわゆる「十九世紀末農業恐慌」の性格について……………常盤 政治
- 西アフリカ・マーケティング・ボード下のコア買付機構の研究……………矢内原 勝
- 巨大株式会社企業管理・利害者集団の分析……………野口 祐

慶應義塾経済学会は、本塾創立百周年を記念して、昭和三十二年度より年報を刊行することを計画し、ここにその第一集を公刊することにした。本年は、本会の刊行にかかわる三田学会雑誌が創刊以来ちょうど五十年を経過した年に当るので、年報の刊行は二重の意味で記念すべき仕事である。

経済学会は、本大学の発展と相ならんで発展し、現在三田学会雑誌のみをもってしては、会員の勉学の成果を世に問うのに不十分な状態と思われるに至ったので、本会はここに新たに年報の発刊を計画し、三田

学会雑誌に掲載しがたい論文を集めてこれを一冊の書籍とすることにした次第である。或る狭い専門分野の綿密な研究は、往々にして一般的興味を欠くものがあり、発表の機会をつかむことが困難である。本年報は経済学会会員の研究業績を集め、その数篇をえらんで、これに公表の機会を提供しようとするものであり、これによって単にわれわれ同人の研究の刺戟となるばかりでなく、広く経済学の進歩に貢献することができるならば、年報刊行の意義は甚だ大きいといわなければならない。

(気賀健三)